

巻頭言



## 健康長寿社会達成に貢献する補綴歯科

Prosthetic dentistry contributing to achieving healthy longevity society

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科

高齢者歯科学分野 水口俊介

平成 26 年に「オーラルフレイル」の概念が紹介された<sup>1)</sup>。社会性や食環境の悪化に起因する身体機能の低下や虚弱の発生から要介護状態に至る構造的な流れを 4 つの段階に分けて説明しているが、口腔の機能低下を経由して、全身の機能低下が進行する過程の概念をはじめて示している。このなかで、口腔のわずかな衰えを示す段階を「オーラルフレイル」と表現した。この言葉は訴求力がきわめて強く、当時、東京医科歯科大学で開催された記者懇談会では、その時のテーマであった新しい歯科診療センターに関する質問はほとんどなく、たまたま話題で取り上げた「オーラルフレイル」に関する質問が大部分であった。日本歯科医師会は「8020 運動」に「オーラルフレイル」を啓発の標語として加え、健康長寿に対する貢献を宣言している。また日本老年歯科医学会は歯科医療関係者が介入すべき病名として「口腔機能低下症」の診断基準について学会見解論文<sup>2)</sup>を発表している。すなわち、「オーラルフレイル」は口腔機能が衰えフレイルへの坂道を下り始めた高齢者をかかりつけ歯科医にいきなう「言葉」であり、「口腔機能低下症」は歯科医が口腔機能の低下を阻止し回復させ、維持するための根拠となる「病名」である。「口腔機能低下症」は本年 4 月に保険病名として取載された。7 個の診断基準のうち 3 個を満たせば「口腔機能低下症」の病名が付与され歯科疾患管理料にて管理し、「咬合圧低下」「咀嚼能低下」「低舌圧」の診断基準を満たせば口腔機能管理加算を算定するという、歯科医療が口腔機能を管理し維持増進させるという仕組みが出来上がったわけである。

ここで補綴治療のアウトカムを考えてみよう。状況によってさまざまなアウトカムが考えられるが、この場面での補綴のアウトカムは「栄養」であろう。野菜や果物摂取が減少すると心臓血管系疾患やがん、糖尿病のリスクは増大するという報告が多数ある。また義歯の不使用など歯の喪失をそのままにしておくと緑黄色野菜、カロテン、ビタミン B、C の摂取が減少し、栄養状態が低下するという報告は多数見られる。また多数歯欠損を補綴しないしていると致死リスクが高くなるという報告も多い。すなわち、「欠損を補綴しない」→「栄養状態や野菜摂取の低下」→「心血管系疾患やがん、糖尿病のリスクは増大し致死率は上昇する」という構造が描けると思われる。ではそこに義歯を装着するとどうなるか。当然われわれは、咀嚼機能は上昇し野菜摂取は良好になり栄養状態は向上し致死リスクは下がる、と考える。しかしながら多数歯欠損に対する補綴処置だけでは栄養状態は改善しないという報告が多い。IOD を用いたとしても食品摂取、栄養状態に有意差はないという報告が多い。しかしながら、義歯製作と栄養指導を併用すると栄養状態は向上する。すなわち適切な栄養摂取のためには摂取するための道具を整備することと、何を食べるべきかについての適切な知識が必要であることを意味している。よってわれわれはそこまで見据えて診療を行うべきである。

多職種が行う「口腔ケア」ではなく歯科医療関係者が行う「口腔健康管理」には「口腔衛生管理」と「口腔機能管理」があるとされている。また口腔機能を発揮する場として歯列、咬合があるが、多職種連携の中で歯科の意義を明確にするならば「口腔衛生管理」と「口腔機能管理」に加えて「歯列・咬合管理」を加えるべきである。

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野

Gerodontology and Oral Rehabilitation, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University

う<sup>3)</sup>。そしてここを守備するのは歯科補綴学である。さらに口腔機能の場を整備するだけでなく、その向こうにある適切な栄養摂取と健康を意識することも本会の使命である。今期の第 2 特命委員会の活動はまさに当を得たものであり今後の進展が期待される。高齢化の進展によりさまざまな要求がわれわれに課せられるであろう。日本補綴歯科学会はそれらに対応する知識とスキルを持っている者の集団である。今後本会の活動はその範囲と深みを増すが、学術団体としての本会の活動を支えているのは会費である。財務担当理事としてのお願いであるが、本会は会費以上の恩恵を会員に還元することのできる団体である。どうか安心して会費を納入していただきたい。

- 1) 独立行政法人国立長寿医療研究センター。平成 25 年度 老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業、「食（栄養）および口腔機能に着目した加齢症候群の概念の確立と介護予防から要介護状態に至る口腔ケアの包括的対策の構築に関する調査研究事業」事業実施報告書、2014.
- 2) 水口俊介，津賀一弘，池邊一典ほか。高齢期における口腔機能低下 一学会見解論文 2016 年度版一，老年歯学 2016；31：81-99.
- 3) 市川哲雄。歯科の基盤を支え、創る補綴の矜持—理事長就任にあたって—。日補綴会誌 2017：9：159-162.